

解釈の連鎖による知の体系

—ミシェル・フーコー『言葉と物 —人文科学の考古学』を読む¹—

The Whole System of Knowledge / Wisdom Constructed by the Endless Cycle of Interpretation:

On Foucault's *The Order of Things: Archaeology of the Human Sciences*

中西 満貴典

NAKANISHI Mikinori

Abstract

The whole system of knowledge / wisdom, in the 16th century of the West, is supposed to be based upon the conception of “similarity.” This study focuses on the way people of that time would recognize things in the world and comprehend abstract ideas, reading and analyzing Michel Foucault's texts of *The Order of Thing* which deals with the epistemological characteristics of three periods: the Renaissance, the Age of Classicism, and the Modern Era. As a consequence, a profound insight of the intellectual world in the European Middle Ages was gained that informs the present discussion of how the sequence of interpretation underlying the relationships between “sign” and “similarity” in their surroundings depends upon the imaginative space of macrocosm and microcosm.

Keywords: 解釈の連鎖、大宇宙・小宇宙、ルネサンス期、エピステモロジー、フーコー

1. はじめに

16 世紀を中心とした西欧における、知の形成の拠りどころになっていたものは、「類似」という概念であった²。自然物を認識したり、抽象的な概念を把握したり、あるいは、テキストを解釈する際に機能していたのは、マクロ・コスモス ミクロ・コスモス 大宇宙・小宇宙によって織りなされる、広大な相似関係の世界空間であった。ミシェル・フーコー著『言葉と物』第二章「世界という散文」の冒頭に掲げられた一節を以下示す（p.42）。

十六世紀末までの西欧文化においては、類似というものが知を構築する役割を演じてきた。テキストの積義や解釈の大半を方向づけていたのも類似なら、象徴のはたらきを組織化し、目に見える物、目に見えぬ物の認識を可能にし、それらを表象する技術の指針となっていたのもやはり類似である。世界はそれ自身のまわりに巻きついていて、大地は空を写し、人の顔が星に反映し、草はその茎のなかに人間に役だつ秘密を宿していた。絵画は空間の模倣であった。そして表象は——祝祭であるにせよ知であるにせよ——つねに何ものかの模写にはかならなかった。人生の劇場、あるいは世界の鏡であること、それがあら

ランガージュ ゆる言語の資格であり、ランガージュ 言語がみずからの身分を告げ、語る権利を定式化する際のやり方だったのである。

われわれは、フーコーのいうところの、16 世紀のエピステーメの概要をとらえようとするところみ——それも、近現代の知の枠組みのなかにいるわれわれが知る範囲で——において、その認識のプロセスを、つぎのように抽出することができる。（1）＜記号＞の解読→（2）＜類似＞の発見→（3）＜認識＞の実現、と。小論において、「記号」、「類似」、「認識」のそれぞれの用語が示

す概念について、フーコーの所論（「世界という散文」）にそって検討をくわえていくことにする。ここで問題にされている 16 世紀の「知」は、17 世紀以降、顕在化し、かつ支配的になっていく機械論的（数量的）自然観へいたる、いわゆる科学革命——通俗的でない方をすれば、魔術から科学への移行——についての再考をうながすための素材をあたえてくれる、という期待がわき上がってくる。われわれの関心は、16 世紀末まで（あるいは、17 世紀前半まで）、ひろく知の空間におよんでいた、錬金術的・ヘルメスの・カバラスの知——合理的な思考とされる科学的思考にいたる前段階の非科学的な低位なものともみなされる傾向にあるが——の特性を知ることにある。近代的な科学のパラダイムのなかにおいては、自然魔術は完全に消失したかのように思われている。しかし小論では、エピステーメの絶対的な断絶はありえないと考える。後代の知のフレームのなかには、先代の知の種は依然として生きのこっていて、完全に消去されることはない、とみなす。錬金術的な知が、17 世紀以降に排除されたのは、知のレベルにおいて、それが劣っていたという理由からではなく、宗教的、社会経済的、技術的、あるいは言説的な各側面の交錯したところに生じたモメントによるものであると考える（本論では、紙幅の関係上、この問題について深く立ち入る）。フーコーの議論のなかで、古典主義時代および近代にいたる局面において、知の断裂がおこったとされているが、それぞれの時代で自然魔術的思想は、無視され、弾圧されながらも、さまざまな変装をこころみ、ふたたび勃興することをうかがっているものとも考える。ひとびとが、そのような思想——たとえ、見た目の様式が中世のものともちがっていても——をもとめる言説が拡大していけば、「科学の時代」の再魔術化もありえよう（安易な、擬似科学的言説が横行するなかで、かえって、「真実性」が見えにくくなっている、いまの世の中において、16 世紀的「知」が懇請されるようになってくるだろう）。

2. 16 世紀における記号

16 世紀の「知」の空間を形成するのに寄与する第一の段階は、「記号の解説」という側面である。ところで、そこでの「記号」概念とはどのようなものであったのだろうか。また、それは、事物の認識の際に媒介される「記号」が記号として機能するためにいかなる様式が用意されていたのだろうか。すこし長い引用にはなるがフーコーの論を以下に引いてみる（pp.53-54）。

……類似は外徴を必要とする。読みとれるように標識づけられていなければ、類似はひとつとして気づかれぬかもしれないからだ。だがその^{シーニュ}記号とはどのようなものなのか？世界のあらゆる相、そしてたがいに交叉しあうかくもおおくの形象のうちで、ひそかな本質的類似を指し示すがゆえに目をとめるにふさわしい特徴がここにあるということを、いったい何によって認知するのだろうか？いかなる形式が、^{シーニュ}記号を^{シーニュ}記号としての独異な価値において成立させるのか？——それは類似なのだ。^{シーニュ}記号は、それが指し示すものと類似関係をもつ（すなわち相似したものをもつ）かぎりにおいて^{シニフィエ}記号である。しかし^{シーニュ}記号は、それがしるしづけている^{ホモロジー}相同関係そのものではない。さもなければ、外徴としての^{シーニュ}記号の特有の存在は、その^{シーニュ}記号が外徴をなしているところのものの相貌のうちに消滅してしまうであろう。^{シーニュ}記号とは、《別種の》類似、最初の相似に隣接しているがそれとはべつのタイプの相似、そして、最初の相似を認知させるのに役だがそれ自体第三の相似によってあきらかにされるような相似なのだ。いっさいの類似は外徴を帯びているが、この外徴もまた、おなじ類似というものの中間的形式にほかならない。したがって、標識の総体は相似関係の円環のうえに第二の円環をすべりこませ、もしあのわずかなずれによって、共感の^{シーニュ}記号が類比的うちに、^{シーニュ}類比的記号が競合のうちに、^{シーニュ}競合の記号が適合のうちに宿り、その適合それ自体が認知されるためこんどは共感の標識を必要とする……というのでなかったならば、第二の円環は第一の円環と、ひとつひとつの点で正確に重なりあってしまうにちがいない。

記号概念をさだめるにあたり、「類似」概念が同時に作動することになる。16 世紀の「知」の機構を先どりするかたちで表わした一連のプロセス、すなわち、「(1) <記号>の解説→(2) <類似>の発見→(3) <認識>の実現」の各過程は一瞬のうちに行われてしまうものである。(1) と (2) の段階は、それぞれ独立した過程ではなく、たがいに連鎖しあっているといえる（それ

解釈の連鎖による知の体系

につづく (2) と (3) の関係も同様である)。「記号は、それが指し示すものと類似関係をもつ (すなわち相似したものをもつ) かぎりにおいて記号である。」というように、記号が、みづからを記号にいたらしめている拠りどころになっているのは、記号が指し示すものと類似関係にある、すなわち、記号と指示対象が似ている (類似点がある) という前提条件が示される。そのような要求が満たされないと、記号に生命はあたえられない。16世紀の「知」を特徴づけているのが<類似>概念であるならば、その時代の知の空間は、記号世界そのものであるといえよう。しかし注意しなければならない点は、類似イコール相同、ではないということである。似ているというのは違うということでもある。記号は、その指示対象と完全な一致をみるものではないことは自明でもある。記号は、その存在条件をみたすために、延々と類似の連鎖をつづけなければならない。「記号とは、<別種の>類似、最初の相似に隣接しているがそれとはべつのタイプの相似、そして、最初の相似を認知させるのに役だつがそれ自体第三の相似によってあきらかにされるような相似なのだ」。自然物の外徴や標識——このような用語じたいには、すでに、記号=類似の定式が内臓されている——は、複数の相似関係の空間 (類似の円環) のなかで、「観察者」による発見をまっているのである。では、そのような観察者は、いかなる特性を有したものであるのだろうか。この問いは、16世紀の「知」を構成する空間において、「人間」はどのように位置づけられて (主体化されて) いるのだろうか、というかたちに置きかえることができる。

3. パラケルススの人間像

16世紀末までの人間のみづからの存在は、パラケルスス (1493-1541 スイス) の人間観のうえに見いだされていた³。すなわち、マクロコスモス (大宇宙) としての天界の秩序と、ミクロコスモス (小宇宙) としての人間の身体の秩序とのあいだに相似関係をみとめる、という前提のうえでの人間観に拠って立っていた。大宇宙の支配下にある小宇宙には、人間以外の自然物もふくまれている。ところが、人間は、動植物とは異なって、ある種の特権的な地位があたえられていた。動植物は天界の意思によってうごかさされ、その大きな力にしたがうほかはないが、人間はそのような隷属的な存在ではない。しかしながら、人間であればだれでもその自由を享受することができるのではなく、ある特定の叡智がもとめられているのである。それは、大宇宙 (マクロコスモス) の秩序を知ることであり、その知見を人間みづからの身体——ミクロコスモスたる小宇宙としての人体——にあてはめるための、両コスモス間の相似関係を知ることである。このような自然界の秘密を体得した者 (「達人たち」、錬金術師など) のみが、特権的に、広大な知の空間のなかで、自然の恵み (= 神の恩寵) を享けることが可能なのである。そのような、ある種、超越的な存在としての人間、いうなれば、パラケルスス的な人間像が、いわゆるルネッサンス期において、強烈な実在性をおびていたのである。パラケルススの人間は、「世界という散文」のなかで以下のように描かれている (フーコー、p.45)。

……パラケルススの人間は、天空とおなじく「星辰にちりばめられて」いる。けれども人間は、「盗人がガリ船に、殺人者が車裂の刑の車輪に、魚が漁師に、獲物が狩人に」つながれるように天空につながれているのではない。「自由で力強く」、「いかなる命令にも従わず」、「他のいかなる被造物にも支配されぬ」のが、人間なる天空の本領である。人間内部の空は、自律的な、それ自身にのみ基礎をおくものとなりうるのだ。だがそのためには、人間がその叡智——これはまた知でもあるのだが——によって世界の秩序に類似したものとなり、それをおのれのうちにとりいれ、目に見える星の輝く天空をこうして両面の天空へと落下させなければならない。そのときこの鏡の叡智は、それがおかれていた世界を逆につつまかえすものとなろう。その巨大な環は、空の奥底まで、いやその彼方までもめぐらざらう。こうして人間は、自分が「おのれの内部に星辰をいだし、… …かくて天空とそのすべての感応力を宿している」ことを発見するにちがいない。

パラケルススの人間の実在性をたしかなものにする、大宇宙と小宇宙との相似関係を成り立たせている——つまり、16世紀末までの知の空間を特徴づけている——「相似」概念は四種類の型 (適合、競合、類比、共感) からなっている。それらの個々の相似の特性について以下素描しておきたい。第一にあげられるのは、<適合>であり、それは、「連結と合致の性格を帯びている。だからそれは、物それ自体にというよりは、むしろ、物を宿す世界全体に属するのだ。世界は万物の普遍的『適合』である。水のなかには、地上における動物や、自然や人間が創りだした品物とおなじ数だけの魚がいる (p.43)」と形容されるような類似概念である。万物の隣接している類似するものどうしを、つぎからつぎへと連結していく、鎖状をなした世界が提出されるのである。「ボルタがその『自然魔術』の一節で喚起するのは、張りつめ震えるこの巨大な鎖、この万物適合の綱にほかならない (同、p.44)」。

相似の第二の形式は、〈競合〉とよばれるものである。それは、適合とちがって物理的距離からなる隣接関係から解放されている。つまり、直接的な近接性から生じる類似とは別種のものである。それは、「あたかも、空間的接触関係が破られ、切り離された鎖の環が、たがいに遠く離れたところで、接触なしの類似によってその円環を再現するのに似ている (p.44)」。「この競合の関係によって、物は、宇宙の端から端へと、連鎖も近接関係もなしに模倣しあうことができる (同、p.44)」のである。

相似の第三の形式は〈類比〉といわれるものである。それは、〈適合〉と〈競合〉とが重なりあったものである。すなわち、〈類比〉は、近接した類似による接合関係をあらわす一方、物理的な空間をこえた類似関係をもあらわすのである。そのような両方からの作用によって、〈類比〉が示す近接関係は格段にひろがったものになる。たとえば、「星とそれが輝いている空との関係は、草と大地とのあいだにも、生物とそれが住んでいる地球とのあいだにも、鉱物やダイヤモンドとそれが埋まっている岩石とのあいだにも、感覚器官とそれが生気をあたえている顔とのあいだにも、皮膚のしみとそれがひそかにしるしづけている身体とのあいだにも、認められるであろう (同、p.46)」。

最後に、相似の第四の形式は、〈共感〉といわれるものである。それは、同時に潜在的に、〈反感〉の概念も内包している。それは、空間的な距離を問題にすることはなく、近接の類似関係からなる連鎖ともことなっている。〈共感〉は、「世界の深層にあって自由な状態で作用する。それは一瞬のうちにもっとも広大な空間をも踏破する。惑星からそれが支配する人間へと、共感はずっと遠くから雷のように落下するのである (同、p.48)」。

〈共感〉のもつばかり知れない力は、「物同士をたがいに同一のものとして混ぜあわせ、それらの個別性を消滅させる (同、p.48)」ような危険な力でもある。したがって、事物の同一化に抗うためのもう一方のベクトル、すなわち、〈反感〉の作用が起動するのである。〈共感〉は、「その双生の形象である反感によって補正されるのだ。反感は物をたがいに孤立した状態に保持し、同一化を妨げる (p.49)」のである。ジャンバッティス・デッラ・ポルタ (1539-1615) は、『自然魔術』のなかで、〈共感〉と〈反感〉の双極的な作用によって、いかに自然界が、ある意味で調和をたもっているのかを例示している (ポルタ、pp.69-70)。

4. 知ること＝言語を言語に関係づけること

16 世紀の知の世界において、自然の事物を認識するということが、ある種の類似体系を発見することを意味していた。世界は、類似によって張りめぐらされた記号の網の目によって構成されていたからである。記号のネットワークは、かぎりなくつづく連鎖をなしていた。デッラ・ポルタは『自然魔術』のなかで、その連鎖のさまについて、つぎのように例を挙げて述べている (pp.89-90)。

「ハトは魔法をさけるためにまず、月桂樹の枝を巣に敷いて、雛を守る。同様に、鳳は白いキイチゴを、カメは刀状葉を持つ草を、カラスはヤナギを、タゲリはヴィーナス・ヘアーを、ワタリガラスはセイヨウキツタを、アオサギはニンジン、……ワシはクジヤクシダ、石はアエテイテスを用いる」。「同じ要領で毒をよける方法をみせてくれる。カメレオンを食べてしまった象はその毒を消すために野生のオリーブを食べる」。「ソリヌスが述べるには、同じことが人間の場合にもあてはまるという。ピューマがトリカブトを呑み込んでしまった場合、狩人はトリカブトで以てピューマの肉をふいて毒を消す。カメがヘビを食べると、マヨナラを食べて毒を消す。クマがマンダラゲの実を味わうと、その毒のためにアリを食べる。……象が傷を負うとロカイの汁を見つけて傷口をいやす。象はまた下痢となるものを見出してくれたので、私たちも利用している」。これらの例をみて分かるように、植物と動物とのあいだの連関 (共感および反感)、さらには、動植物と人間との連関が網の目のように展開している。ある種の類似である、共感と反感の連鎖によって自然界の秩序が構成されているといえよう。人間をふくめた、あらゆる生き物のあいだにおける相性によって、毒なるものをいかにしてさけて、自らの身をまもるための知恵が最大限に動員される。それは、類似によって構築された宇宙のなかでの出来事である。コスモスをかたちづくっている、類似関係の体系は、つねに類似がべつの類似をもとめることによって維持されているのである。おわりのない無限の類似の任務が、小宇宙の構成と維持のために課せられているといえる。それゆえ、16 世紀の知は、ある種、「過剰」という側面をおびているのである。

16 世の知を特徴づけるものとして、まず、その知は、「過剰であると同時に絶対的に貧困 (フーコー、p.55)」である、という指摘があげられる。その時代の知は、〈類似〉というものが大きな役割をはたしていたことを、われわれ、すでに見てきた。また、〈記号〉が、記号であるための条件として、それが指し示すものと類似関係をもつことが必要とされていた (p.53)。記号は、それ自身、単独では存在する (意味をもつ) ことはできないのである。また、記号と関係しあう、〈類似〉もまた、それ自身が存在することはできないのである。すなわち、ほかのなにかとの関係のうえに立って、はじめて、その生命があたえられるのである。類似は、ほかの相似との関係づけによって、その存在性が担保される。しかし、ここで、呼びこまれた相似は、またさらに、べつの相似をかりださなくてはならない、という連鎖がまらうけている。このように、つねに〈類似〉は、ほかの相似との無限の関係づけを強いられる運命にある。その意味で、16 世紀の知は、目に見えるはっきりとした土台があったというよりも、かぎりなくつづ

解釈の連鎖による知の体系

く類似の連鎖に依存しているものであり、「過剰」という形容がなされるのである。また、いっぽうで、そのような知は、過剰とは正反対の概念である、「貧困」という特性をおびている。ひとつの自然物を指し示すために、記号がさしだされる。しかし、その記号は、類似によって生命があたえられているため、ある事物を指し示す記号が意味をもちつづけるためには、無限の類似の関係づけがもとめられてくる。かぎりなくつづく（過剰の）、類似の連鎖がある一方で、その指し示す対象は、ひとつの事物でしかない。ある意味では、どんなに一生懸命にがんばっても、おなじものしか知ることができない——つまり、貧困——という、仕組みがあらわれてくるのである。

第一は、この知が過剰であると同時に絶対的に貧困なことだ。それは限界をもたぬがゆえに過剰である。類似はそれ自体においてけっして安定したものではありえず、べつの相似と関係づけられてはじめて固定される。そしてこのべつの相似は、それ自体さらにあらたなる相似を呼びよせずにはおかない。それゆえ、それぞれの類似は、他のすべての類似の集積を介してしか価値をもたず、もつともとるにたらぬ類比関係でさえ、それが正当なもの認められ、ついに確実なものとして現われるためには、世界全体が踏破されなければならない。したがってそれは、たがいに呼びあうもろもの確認の無限の推積によって進むことができ、またそうして進むべく定められた知なのである。だからこの知は、その土台からして砂のようなものだ。知の要素相互の、可能な唯一の結合形式は付加である。そこから、林立する知のあの巨大な円柱と、それらの単調さが生れてくる。記号とそれが示すものとのあいだに紐帯として類似（それは、標識にも内容にも同様に宿っている以上、第三の力であるとともに唯一の力でもある）をおくことによって、十六世紀の知は、つねにおなじものしか認識することができず、それも、際限のない行路のけっして到達されぬ果てにおいてしか認識できないという立場に、みずからをおとし入れたのであった（フーコー、p.55）。

16 世紀の知の特徴のひとつとしてあげられている、「過剰であると同時に貧困である」という撞着的な概念の指摘のうち、とくに<貧困>についての言及は、つぎのようにもいえることができる。「記号と類似とのたわむれとしての自然は、宇宙の二重化された形象にしたがってそれ自身のうえに閉じるのである（同、p.56）」この、<宇宙の二重化された形象>とは、大宇宙および小宇宙を指し示している。

16 世紀の知を構成している前提として、自然の事物のなかに、神は、いくつかの秘密をかくし、それらを人間によって発見されるべきものとしているという自然観がある⁴。とくに、植物のなかに、人間の目に見えない効能がやどされており、それを見出すための知恵が要請される。パラケルススは、病気に効く薬をつくるために、どの植物にどのような力が潜んでいるかをさがす際に適用したのが類似の思想である。「こうした植物の効能を探す方法が類似の思考であり、そのカギをにぎるのが『徴』^{しるし} signatura の教義である（菊地原、p.220）」。徴は事物に秘められた本質を外にあらわした可視的な標識である。つまり、徴とは、「各事物の内部にやどる固有の不可視な本質や効能が、目に見えるかたちで事物の外観に印しづけられた標識（同、p.221）」のことを意味する。そうであるならば、植物の目に見えない効能は、目に見える徴（＝外徴、標識）を以て解きあかされることになる。パラケルススの着眼は、そのような徴の解説を可能にするのは、「事物の形態と人間の身体部位との類似が決定的な役割を果たしているという認識であった（同、p.221）」。事物と人間は、それぞれの形態や部位といった外観として検知しうる標識・外徴が、類似の体系を、になっているのである。類似関係のシステムは、コスモス（宇宙）をかたちづくっている。大宇宙（天界）と小宇宙（地上界）との照応関係のみならず、小宇宙を構成する自然の事物どうしにおいても照応がみられ、事物の外観と人間の身体——人間そのものも、ひとつのマイクロコスモスであるとみなされる——とのあいだにおいても、類似の力によって、たがいにむすびつけられる。類似をとおして、コスモスは、記号の連鎖の世界を構築していく。

16 世紀における、このような自然観、つまり、エピステーメーは、世界イコール世界にかんする記号の体系、という命題をみちびくことになる。より適切ない方をするならば、「世界の体系そのものと世界についての知識の体系は本質的に同じ構造をもち、互いにつながりあった類似が織りなす錯綜したタピストリーとなる（同、p.228）」のである。それゆえ、自然物を認識するということは、その自然物そのものの類似の体系、すなわち、マイクロコスモスの仕組みを発見することを意味するのである。秘密の効能・本質をやどした自然物が外徴によって読みとかれるべく、標識の体系、つまり、類似の連鎖のさまを見出すことこそが、知恵であり、それが、すなわち、16 世紀における「知」であったのである。類似関係を探究することは、具体的には、事物の外徴を解釈す

解釈の連鎖による知の体系

ることを示している。自然物の内包する本質の可視的なあらわれとしての徴は、事物の標識、つまり、事物を指し示す記号に変換され、類似の体系は、すなわち、記号の体系となる。16世紀において、事物の本質を識る、すなわち、自然物から構成される小宇宙の機構を識るということは、類似をとおした記号の体系を解釈することを意味している。それは、同時に、マイクロコスモスのテキストを解釈することをも示唆している。いいかえれば、解釈といういとなみこそが、知の営為であったのである。それは、端的でない方をすれば、世界＝書物、ということになる。事実、世界の構造は書物のテキストの構造と等価であった——よりいっそう、正確にいうならば、相似関係をなしていた——のである。このようなことをいい得たのは、そもそも、16世紀において、一般に、

「知る（識る）」ということは、^{ランガージュ}「言語を言語」^{ランガージュ}に関係づける（同、p.65）」ことであったからだ。マイクロコスモスが、類似の連鎖であるならば、「知る」といういとなみは、その連鎖の体系を解読すること、すなわち、記号——記号じたいも類似の連鎖から成る——の交錯したテキストを読むことを意味している。解釈は、テキスト読解、すなわち、言語をほかの言語に関係づける作業、に通じているのである。ここで、解釈という用語を使ったが、それは、註釈という概念におきかえることができる。言語と言語のあいだ、あるいは、テキストとテキストとのあいだに書き込むような注（註）の概念である。16世紀の知が、言語を言語に関係づけることに根ざしているならば、そのような知の実践は、註釈という第二の言説を生むことになる（同、p.65）。このような言説は、記号の宝庫である（同、p.59）。神によって、自然物のなかに、目に見えない宝（＝効能）がかくされているのとおなじ構図が、可視化された言説のなかに仕込まれているのである。テキストは、読まれ解釈されることがもめられている。自然界の秘宝は、探究されることが要請され、かつ、宿命づけられているのである。しかしながら、類似の連鎖をおなじように、テキスト解釈もまた、おわりのない任務に回付されていると、とらえなければならない。

してみれば、知ることは^{ランガージュ}「言語を言語」^{ランガージュ}に関係づけることである。語と物との画一的な平原を復元することである。それはあらゆるものを語らせること、いいかえれば、あらゆる認識のうえに註釈という第二の^{ディスクール}「言説」を生じさせることにほかならない。知に固有なものは、見ることで証明することでもなく、解釈することなのだ。聖書の註釈、＜古代人＞についての註釈、旅行者の報告についての註釈、伝説や物語の註釈。人は、解釈の対象となるこれらの^{ディスクール}「言説」それぞれにたいして、あらゆる種の真理を表明する資格を要求するのではなく、ただそれについて語る機会を求めにすぎない。^{ランガージュ}「言語」はそれ自体のうちに、増殖するための内的原理をもっている。「われわれは物を解釈するよりも解釈を解釈するのにいそがしく、他のいかなる主題に関する書物よりも書物に関する書物のほうがたくさんある。われわれはたがいに註解のつけあいばかりしているのだ。」これは、みずからの記念碑のしたに埋没した文化の破産の確認ではなく、十六世紀の^{ランガージュ}「言語」がそれ自身にたいして持たざるをえなかった関係の定義である。……その定義からして、註釈の任務はけっしておわることはない。それでいて註釈は、^{ランガージュ}「言語」のうちにひそむ、謎めいた、つぶやかれるような部分をひたすら目指すのである。……（フーコー、pp.65-66）

このような、けっして収束点を見出すことのない、延々とつづくテキストの解釈・註釈を行うことそのものが、聖なる営為であり、「知」が体現されたものであるという思想は、幾世代にもわたるラビたちによる、タルムードのなかのテキスト解釈・註釈に通じるものがあるといえよう。スーザン・A・ハンデルマン曰く、「この配列の様式は、ユダヤ的発想にとって基本的であるテキストとその解釈に対する態度を表わしている。ラビの世界は、現在よく使われている用語で言えば、＜^{インター}交・テキスト性＞の世界である。テキストは互いに対して反響し、相互反応を示し、相互貫入する。経験的事実が科学的観察者によって客観的実在として扱われるのと同じように、テキストを構成する諸要素はそれを研究する人々にとって客観的実在として扱われる。今日のタルムード研究者は、ヒレルとシャムマイ（一世紀の教師たち）の間で行われた討論に、これらふたりの人が自分と同じ時代の人であるかのような態度で、入り込んだり、十七世紀の別のラビの意見を押しえて別の意見を支持したりして、自分自身の結論を引き出す。タルムードに直線的な年代順列はないのである（ハンデルマン、p.96）」。このような思考様式は、間テキスト的空間、あるいは、非実体

解釈の連鎖による知の体系

的な関係論的世界にあって意味が生成しうるものであるという思想につながっている。そのような思想にもとづくならば、かぎりなくつづく解釈の連鎖のなかにこそ、「実在性」なるものを見出すことができるのである。

16世紀の知において、世界はまさに、解説せねばならぬ記号でおおわれていた。「…類似と類縁関係を啓示するこれらの^{シーニュ}記号は、それ自体相似関係の形式にほかならない。それゆえ、認識することは解釈することである。すなわち、目に見える標識からそれをつうじて語られているものへ、それなしには物のなかで眠る無言の^{パコー}言葉にとどまるにちがいないものへと、赴くことなのだ（フーコー、p.57)」。ここに、時代のエピステーメーによって復活された「自然魔術」のくわだてが顕在化してくる。自然界の事物の外徴が、その隠されたもの（＝意味、宝、効能等）を指示する——換言すれば、解説・解釈されるべき記号が、事物の本質を指示する——のは、徴（＝標識）が、つまり記号が、隠されたものに類似しているかぎりにおいてである。徴・標識・記号といったものと、発見されるべき隠されたものとのあいだには、類似という、いわば、結合剤によってむすびつけられている。このような、ある種の運動体の相において、標識へのはたらきかけは、標識によって無言のまま指示されているものへの影響を行使する力、つまり、魔術的な力としてあらわれてくるのである。「標識によってひそかに指示されているものに同時に作用をおよぼすことなくして、標識に働きかけるということはいえまい。だからこそ、頭、眼、心臓、肝臓をそれぞれ表象する植物が、おのおのの器官にたいして有効性を持ち、動物までが自分を指示する標識に敏感になるのである（同、p.58)」。

16世紀の知は、類似を媒介した世界の把握と、把握の対象世界の変容をひきおこす可能性によって特徴づけられる。そのような知は、ある種、魔術的な空間でもある。「類似によって張りめぐらされた記号の網の目によって世界は構成され、自らの意味をもちつづける。パラケルススが主張するところによると、こうした類似によって築かれた世界において、人間と世界の根源的な一致を見出す術こそが『魔術』*magia*であり、類似をとおした世界の把握こそ『魔術のはじまり』なのである（菊池原、p.240)」。このような世界の把握のしかた、認識のしかた、すなわち、「知」の様態によって、魔術作用のひとつである遠隔操作の概念が生じてくる。

ある事物に魔術をほどこすことによって、その事物を意のままに操り、あるいはこれと関係する別の事物を離れた場所から操作することが可能になる。こうした操作が認められるのは、世界が根源的には統一されていて、すべての事物が絶えまない連鎖を形成しているという前提があるためだ。この「存在の連鎖」は事物の共感、すなわち各事物のあいだの類似をとおしてしかあらわれることはない。二つの事物が類似していれば、一方の事物になんらかの作用を与えることで、もう一方へも影響をおよぼすことが可能となる。これは、当時、磁石にみられるような遠隔作用に多くの知識人が夢中になったことや、武器軟膏と呼ばれる負傷を生じさせた武器に薬をぬることによって、武器によって生じた傷の治療が可能になるという処方術が真剣に議論されたことと結びつく。（菊池原、pp.244-45)

16世紀の知の空間にあって、その知の資源を最大限に享受することができる、唯一特権的な生き物は人間であった。それは、パラケルスス的な人間であり、マクロコスモスとミクロコスモスとの照応関係を知り、同時に、ミクロコスモス内部における照応関係——自然物の標識と、その隠されたものとの類似をとおした体系——を解説できる知恵ある者のみが、そのような超越的な存在になりえたのである。

5. おわりに

ミシェル・フーコー著『言葉と物』第二章「世界という散文」の読解をつうじて、西洋において、16世紀までは「類似」が知を構築していた、という所論の検討を行った。そこには、天界と地上界とのあいだに特権的に位置するとされる、パラケルスス的人間観に象徴される世界像が示されていた。ルネッサンス期の知の空間を特徴づけている、大宇宙と小宇宙は、たがいに類似によって密接に関連づけられていた。このような世界観にあっては、世界を認識するという営為は、目に見える自然物の外徴を解釈すること、つまり、記号を解釈することを指していた。言語は、標識や相似の分布の一部としてとらえられていたがゆえに、言語は、自然物として研究されるべきものと、とらえられていた。書かれた既存の言説は、「註釈」によって、べつの言説を生み出し、無限の解釈の連鎖の可能性が内包されていた。小論において、フーコーのテキストなどをもとに、16世紀の知の素描をこころみだが、その時代の「知」のひとつの側面を切り取ったものでしかないことは否めない。西洋の16世紀の知は、突如あらわれたものではなく、新プラトン主義の系譜や、一元的で階層的な宇宙像を体現した、ライムンドゥス・ルルスによる「学問の樹」のイメージなどに遡る。また、フランシス・ベーコンおよびルネ・デカルトの思想、錬金術と近代科学との相互貫入と分離の様態など、「16世紀

の知」というように単純にひとくくりにはできない、きわめてふかく広範にわたる問題がひそんでいることも付言しておかなければならない。

註

- 1 本稿は、日本コミュニケーション学会第47回年次大会（2017年6月3日、於京都ノートルダム女子大学）における、パネル発表時（パネル名：「レトリックにおける解釈の連鎖・表象・文化—『言葉と物』を読み直す」）のプロシーディングズ（「16世紀にみる解釈の連鎖と知の構築」）を加筆・修正したものである。
- 2 本稿の随所において、「16世紀（の知）」という表現が用いられているが、問題にしている知の歴史的な断面は、16世紀に限定するものではなく、17世紀前半にまでおよぶ性質のものである、ということをおこなうべきではない。神聖ローマ帝国を中心に展開した、宗教的かつ政治的戦争（三十年戦争 1618-48）にいたる、渾沌としているが、活力にみちた、知の変革への胎動をみることができる（フランシス・A・イエイツ著『薔薇十字の覚醒』などが詳しい）。
- 3 パラケルススにかんする研究書として、ヤコビ（1984）、種村（1977）などがみられる。
- 4 このような思想は、近代科学誕生を推進したといわれる、フランシス・ベーコンの自然哲学に受け継がれている。ベーコン（1978）曰く。「神は我々の空想の〔描く〕夢を、我々が世界の雛型として出してくるがままにはさせないだろうし、むしろ慈しみ深くも、神の啓示するところ、創造主が被造物の上に印した足跡と印章の真の姿をば、我々に記述させて下さるようにと願うのである（p.53）」と。神によって、自然の事物のなかにかくされた秘密（宝、^{ことわり}理）を自然物の表徴を手掛かりにして、類似の体系のなかで知るにいたるのか、あるいは、実験によって、かつ帰納法的にみちびかれた、その種の秘密を知るにいたるのかの方法論のちがいが、やがて問題になってくる（近代科学の誕生は、ある意味で、方法上の新展開が主要因ともいえる）。いっぽう、ベーコン思想は、ルネッサンス期の（錬金術的かつ魔術的な）自然観と対極にあるものではなく、17世紀前半に沸き起こった（錬金術的かつ魔術的色彩をおびた）薔薇十字運動に通じるものがあるのではないかと、という洞察をしめす論考もみとめられる（「イギリスでの薔薇十字展開」『薔薇十字の覚醒』pp.173-188）。また、近代思想の成立と科学的認識の形成を探究した、パオロ・ロッソ著『魔術から科学へ』において、ベーコン思想を、機械的技術・魔術・科学の歴史的な脈から詳述された論考も重要文献である。

参考文献

- イエイツ、F・A.（1986）山下知夫訳『薔薇十字の覚醒』工作舎。
- 菊地原洋平（2013）ヒロ・ヒライ編『パラケルススと魔術的ルネッサンス』勁草書房。
- 種村季弘（1977）『パラケルススの世界』青土社。
- ハンデルマン、S・A.（1987）山形和美訳『誰がモーセを殺したか』法政大学出版局。
- フーコー、M.（1974）渡辺一民・佐々木明訳『言葉と物—人文科学の考古学』新潮社。
- ベーコン、F.（1978）桂寿一訳『ノヴム・オルガヌム（新機関）』岩波書店。
- ポルタ、G.、デッラ（1990）澤井繁男訳『自然魔術』青土社。
- ヤコビ、J.編（1984）大橋博司訳『パラケルスス 自然の光』人文書院。
- ロッソ、P.（1970）前田達郎訳『魔術から科学へ』サイマル出版会。

（提出日 平成30年1月9日）